

～人生の洪水に注意。わかっているはわかっている証拠～

マザーテレサは「愛の反対は無関心だ」と言っています。愛が冷めると言うことは憎しむことではなく関心が無くなることです。隣に誰が住んでいようか、誰が苦しんでいようか、殴られていようか関係ない…自分のことだけで精一杯なのです。そして、終末にどういふ事が起こるのかと言うと、多くの人たちの愛は冷たくなり（12節）、地震が起こり（7節）、各地で暴動が起こる（10節）と、マタイの福音書24章にもずっと書かれています。今起っていることです。中東地域でたくさん問題が起きています。そして世界的にたくさん災害が起きています。なぜ、こういう問題が次々と起きて毎回悲劇が繰り返されるのか、私たちは、そろそろこの中から気付かなくてははいけません。それは、私たちが「忘れる」という大変な問題を持っているからです。この「忘れる」というのは、人間に与えられている最大の能力です。しかし、私たちが本当に覚えておかないといけなことは、しっかりと記憶されずに置き換えられて自分の都合のいいように記憶されます。何か大きな災害が起こってから気付いていたのでは遅いのです。私たちはもうすでに無関心・大切なことを忘れてはいけなことは知っています。この「忘れる」病気を取り除いていきましょう。神さまの前で「赦します」「愛します」と祈ってゆだねた心のモヤモヤは、忘れるべきです。しかし、私たちが忘れてはならないことがあります。私たちは、頭の中では理解している思いがあります。しかしそれが具体的に描けないのです。それで分かったことになるのでしょうか？私たちがせよと言われていたことが分かって、しなければいけないこともやるべきことも理解しています。しかし、日が経つにつれすっかり忘れてしまうのです。私たちは、今回、東日本大震災を通して学んでいます。孤立した集落、お年寄りなど、たくさん悲劇がありますが、こういう悲劇は私たちの周りの日常でも起きています。大きな現状が起きてから気付くのでははいけません。そのことを通してどう考えるか、何を学び、どう行動するか考えなくてははいけません。そのような時に①私たちはどう考えるか②その経験を通して何を学ぶべきなのか、そして③それを考えた時にどう行動するか、この3つのことについて考えなくてははいけません。（マタイ7:24～27）神さまを信じていてもいなくても「私はこう歩むべきだ・こう生きるべきだ」という思いが心の内にあります。私たちの使命・アイデンティティー、つまり私たちがなぜ存在しなぜ生きるのか…私たちが自分の存在理由を知ることは私たち人間の中心です。私たちがどう歩むべきで、どう生きるべきなのか、こういう思いに対して神さまは①「心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ」「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ」（マタイ22:37・39）②「だから、明日のための心配は無用です」（マタイ6:34）「栄華を窮めたソロモンでさえ、このような花の1つほどにも着飾ってはいませんでした。」（マタイ6:29）③「だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。」（マタイ6:33）と、この3つのことを土台としなさいと言われていた。私たちはこのことをいつも忘れてしまいます。これらのことが心から消え去る時があります。そんな時が要注意です。私たちの土台が無くなっている証拠です。愛の上に信仰の土台を置きなさい、「いつまでも残るものは信仰と希望と愛です。その中で一番すぐれているのは愛です。」（1コリ13：13）と言われていた。愛し合う気持ちがあれば、殺し合ったり誰にも気付かれずに失われる命があるはずありません。しかし、この愛が自己中心という自分の自我が変わると全てを取り除いて失う結果になります。みんなが「愛されたい」と思っています。その「愛されたい」人たちがどうやって人を愛するのですか？「あなたが愛してくれるなら仕方がないから愛します」となるしかないので。この現状の中でどうやって私たちが愛を示すことができますか？だから神さまは自ら命を絶ったのです。私たちが愛するが故にイエス様は十字架にかかり犠牲になられたのです。そして私たちが愛されたことを知るのです。愛されたことの無い人が人を愛することはできません。だから無関心になってしまうのです。でも愛されたからこそ人は「愛する」ということを心の中心に置くのです。ペテロがそうでした。ペテロはイエス様を裏切りました。後にイエス様はペテロの前に現れて「あなたは私を無条件で愛しますか？」と尋ねます。するとペテロは「条件付きでしか愛せないことをあなたはおぼえています」と答えます。イエス様は「それでもいい。それでもあなたは私を愛しますか？」と3度ききます。イエス様は3度目には「条件付きで私を愛しますか？」と尋ねます。ペテロは「私は条件付きであなたを愛します」と答えます。この後イエス様は「私の羊を養いなさい」と言われます。（ヨハネ21:15～17）イエス様は「あなたが私を愛する愛は条件付きで構わない。その条件付きの愛で私は十字架にかかって死んだ。しかし、あなたはその愛をもって、それでもいいから隣の羊を養いなさい（牧しなさい）」と伝えられました。神さまは、私たちが条件付きでしか愛せないことを知っていますが「あなたは愛されたことを知りなさい」と伝えていた。（黙示2:2～5）他の箇所では「あなたがどのように受け、また聞いたのかを思い出しなさい」「そして死にかけているほかの人たちを助けなさい」（黙示3:3・2）と言われていた。黙示録の2章から3章ですが、全てが「初めの愛に立ち返りなさい」を軸に語られています。私たちが愛されたことを知りました。しかしこの初めの愛を忘れてしまい、また大変な状況が起こって思い出し、また忘れる…自分中心になったり、何度も同じことを繰り返してしまいます。私たちが、自分の使命を忘れてはいけません。私たちが、なぜそれをするのかを忘れてはいけません。私たちの人生には、信じられない・想定外な東日本大震災のような洪水が起きます。イエス様も言われています。「あなたがたは、世にあっては患難があります」（ヨハネ16:33）しかしここからが大切です。「しかし、勇敢でありなさい。わたしはすでに世に勝ったのです。」（ヨハネ16:33）と語られました。今回語られた最初の御言葉…岩の上に建てた家、神さまの言葉の上に建てた家でなければいけません。私たちがなぜ私たちの家を建てるのか、私たちの人生が何のためにあるのかを忘れてしまえば、今、私たちがどれだけのことを行ってもそれは無意味です。なぜかと言うと、その時の私たちの感情や思いで行うだけであって、その行いから得たものは一時は良くても最終的には色んなものをなぎ倒してがれきの山と化してしまうからです。自分一人が倒れるならいいです。しかし、人はコミュニティーを求めてお互いの繋がりで生きています。しかしそのことを忘れていつも自分中心で「自分だけが幸せになればいい」と願って生きています。しかし、こんな私たちのためにイエス様は十字架にかかられました。そして今回、東日本大震災という大災害から学ばされています。私たちがどのように受けどのように聞いたのか、そして私たちが何をすべきなのかどう生きるべきなのかを考えなくてははいけません。神さまを知っていても無かろうか関係ありません。とくに神さまを知っている人には責任があります。もしも、私たちが語らなかつたせいで周りの人が滅びたらその責任は私たちのあると言われていた。神さまを知っている人は多くの愛を受けています。だからそのまま生きてはいけません。多くの愛を受けたのですからその初めの愛に立ち返らなければなりません。大洪水に備えて私たちがしなければいけないことは①神の初めの言葉に立つことです。（1ヨハネ2:24・25）私たちが決意した最初の御言葉に留まらなければなりません。人生の中で大問題（洪水）が起きた時に信仰のある人と無い人で試されるのです。そこで差が生じます。人を傷つけ自分さえよければいいと考えるのは世の中の人でそれが当たり前になっています。しかし信仰のある私たちはそこで自分たちの使命を考えなければいけません。どう行動すべきなのか、愛をもって義に生きなければいけません。羊を我の上に置かなければなりません。ダビデはいつも「私はいつも私の前に主をおいた」（詩16:8）言っていました。私たちも自分の前に神さまをおいて歩まなければいけません。（詩1:2・3）私たちが「こう進む」と決めたことを・神さまと決めたことを果たさなくてははいけません。（1ヨハネ3:9～11）私たちが隣人を愛し受け入れているでしょうか？自分以上に周囲の人たちの祝福を祈っているでしょうか？自分には関係ないと思っていないでしょうか？（マタイ5:39～40）この箇所のようにするのは難しいかもしれませんが、このような思いをもって歩むかどうかで違いがあります。②義に生きなければいけません。ダビデはいつも「私はいつも私の前に主をおいた」（詩16:8）言っていました。どういうことでしょうか？それは、自分に嘘をつかないと言うことです。自分が正しいと理解していることを行うのに自分に嘘をついて私たちはそれをせすにしたくないことを行ってしまうのです。なぜかと言うと義という言葉が無くなっているからです。我が上にはいってはいけません。自我になってしまいます。だから私たちはいつも私たちの前に主をおかなければいけません。羊のように自らの命を失ってくださった神さまの前に心を向けていくべきです。そして③忘れず継続しなければいけません。私たちがすべきことを知っています。でもすぐに忘れてしまい継続できません。（箴4:4～6）知識は人を高ぶらせます。だから私たちが頼らなければならないのは神さまの知恵です。大問題（洪水）が起きた時にどう行動しどう歩むべきなのかをもう一度考えましょう。私たちがしなければいけないことは知識ではなく知恵によるのです。神さまがその時どう語っているのか聞かなくてははいけません。私たちがしなければいけないことは、初めの言葉に立ち、神さまが私たちにせよと言われたこと・愛と義に土台をおいて私たちがしなければいけないことをするという。そしてその上で自分に嘘をつかず正義にたつと言うことです。そしてそれを忘れずに継続することです。そうすると私たちは無関心にならずに神の言葉の上に土台を置き「わかっているのに」といういいわけは出てこなくなるはず。そうすると、私たちのまいた種は必ず実を残します。（ヨハネ15:16）この箇所でも言われています。私たちが実を残さなくてははいけません。振り返ってみてください。私たちが実を結んでいるでしょうか？また、その実がさらに多くの実を結んでいるでしょうか？それが残っていないとすれば、今までの私たちの歩みは無駄になってしまいます。そして私たちががろうじて思っていることすら大洪水にのまれてしまいます。だから、そうならないためにたくさんの実・土台を築いて高いところに私たちの良いものを残していかなければいけません。（要約者：行司佳世）